『人権作文コンテスト』栃木県大会で大根田さんが最優秀賞

芳賀中学校3年生の大根田花歩さんが、平成24年度全国中学生人権作文コンテスト栃木県大会で最優秀賞を受賞しました。

大根田さんは、小学生のときに体験した祖母の認知症という現実に、両親、兄、祖父の温かい家族愛に自分も祖母から受けた愛情を重ね合わせ、そのことで心が大きく成長していった様子を書いています。

祖母が施設に入所し、家族が離れ離れになっても、心はつながっていると信じる純粋な心が読む人に感動を与えます。

大根田さんが最優秀賞を受賞した作文全文をご紹介します。

離れていても家族

芳賀町立芳賀中学校
三年　大根田花歩

「六十五歳以上の十人に一人が認知症であり、ここ十年前後で倍増した」とのニュースがこの前流れていた。「認知症」という言葉を耳にして、普段ニュースに関心のない私も、真剣に聞いてしまった。その中で「認知症の人を理解し、家の中で介護できるとよい」というようなことも言っていた。私はそれを聞き、「家の中での介護は、そんなに簡単ではない」と、悲しい気持ちになった。

私の祖母は、共働きの両親にかわって、私や兄の面倒をいつもみてくれていた。私のお気に入りの三輪車を押して散歩に連れていってくれたことを、よく覚えている。畑仕事も好きで、夕飯のおかずには、祖母の育てた野菜がいつも並んでいた。そんな働き者の祖母だったが、私が小学生の頃から少しずつ言葉が不自由になり、会話が難しくなってきた。そのとき、祖母は認知症なんだと知った。それでも、私たち家族が一緒にいるのには特に問題はなく、話せない祖母の言いたいことも、家族はだいたいは理解できていた。

しかし、祖母の認知症はどんどん進行し、去年の夏頃には、自分をコントロールできなくなっていた。涼しい部屋の中でも叫びながら服を脱いでしまい、母は何度も何度も着せていた。トイレには二人がかりで連れて行くが、体重をかけ、爪を立てるので、みんなの腕は傷だらけだった。父も、暗いうちから起きてしまう祖母の面倒をみていた。高校生の兄は、平仮名表を広げて優しく教えていた。兄にほめられると、祖母は小さな子供のように嬉しそうだった。そして、祖父は、一番長い時間を祖母と過ごしていたため、苦労も多かった。いつも穏やかで、我慢強い祖父が、「もう、じいちゃん、だめかもしれない。」と、兄にこぼしたこともあった。兄が両親に「ばあちゃんもかわいそうだけど、このままじゃ、じいちゃんが倒れるよ。」と父に言っているのを聞いた時、祖父母のことを考えている兄に対し、「私とは違う。お兄ちゃん、すごいな。」という思いをもった。それまで、祖母に一番関わってこなかった私だったが、「少しでも家族のために」と、できるだけ祖母に話しかけたり、トイレの手伝いをしたりするように心がけた。

結局、祖母は週数回デイサービスを受けるようになり、病状が悪化した冬には、施設に入所した。「ばあちゃん、行ってらっしゃい。」と見送った時、祖母はいつもより泣いていて、家族みんなの手を離さなかった。私たちも泣いていた。

今、祖母は車で三十分くらいの施設で毎日過ごしている。ニュースでいうように「理解して、家の中で……。」は、それができるならその方がいいに決まっているが、やはり我が家では難しかったと思う。それでも祖父は、「ばあちゃん、今頃何してるかなあ。」とか、「本当は、うちに置いておきたかったけどなあ。」と、自分を責めるようにつぶやくことがある。そんな時、両親は、「ばあちゃんのためにもよかったし、みんなのためにもよかったんだよ。じいちゃんがばあちゃんを大切にしてたのは、みんな、わかってるんだから。」と答えている。私もそう思う。確かに、家族みんなで、祖母を支えてあげたかった。そのために、いろいろな病院に行ったり、みんなでできることを考えたりして努力してきた。でも、祖父は心も体も疲れてしまい、共働きの両親もあまり眠れなくなってしまった。思い出しても悲しいことがたくさんあった。

今、家の中は、祖母の認知症が悪化する前のような、穏やかさを取り戻した。そして、祖母も施設の中で、手厚い介護を受けながら生活している。土日に家族が交替で行くと、涙ぐんだり、手を握ったりしてくる。「誰だか区別はつかなくなっている」とのことだが、兄や私の手は特に離さない。無表情になるのも認知症の特徴のようで、昔のような笑顔は見られないが、愛情を注いでくれていた私たちのことは絶対に忘れていないと信じている。

日本は、高齢者の割合が高く、それに伴い認知症の問題も増えている。我が家は、家族だけで背負わずに、外部や行政の力を借りたからこそ、今もみんなが穏やかに暮らすことができている。一人一人が幸せに暮らすことができているのだ。自分たちだけで悩まずに、できないことは助けてもらうことが大切ではないだろうか。

離れていても家族――六人家族だった私たち家族は、祖母一人と私たち五人に離れてしまったが、心は繋がっていると信じている。そして、離れていても、祖母のためにできることをしていこうと決めている。

私は、小学生の頃から祖母も応援してくれていたバレーボール部を、八月末に引退した。時間ができたので、今までよりは会いに行けると思う。

まずは、今度の休みに、夢だった全国大会に出場できた話をしてきたい。言葉はあまり理解できなくても、私の気持ちは、きっと伝わるに違いないから――。

受賞の喜び

大根田花歩さん

８月の末までバレーボールの関東大会に向けて部活動を続け、急いで夏休みの宿題の作文を書きました。先生から体験したことをわかりやすく伝えるような書き方を指導されていたのを思い出し、祖母のことや家族のことを書きました。賞に入るとは思ってもみなかったので、家族や友人からもほめられてうれしいです。今度、栃木放送のラジオ番組の中でこの作文を朗読しますので、よかったら聞いてください。

国語の先生から

大塚徳子先生

国語の担任として、身近な出来事や体験したことを基に物事を深く考え、わかりやすく伝えられるように表現するよう指導してきました。今回は、大根田さんの素直な気持ちが、家族やおばあさんの様子を上手に表現できたのだと思います。これからもこの気持ちを忘れずにいてほしいと思います。

町の人権啓発活動　～町の人権擁護委員さんの活動をご紹介します～

■人権擁護委員とは

法務大臣から委嘱された民間の人たちです。常に自由人権思想の普及高揚に努めることを使命とし、法務局・地方法務局の職員とともに、人権侵害事件の調査処理、人権相談、人権啓発活動などを行っています。

■人権擁護委員の活動

５月21日と９月27日には、芳賀北小学校で「人権の花」活動が行われました。

「人権の花」活動は、町人権擁護委員が小学校児童と一緒に花を植え、児童が自分たちの手で協力して育てることで、優しい思いやりの心と人権思想を育むことを目的として行われています。

また、11月６日には、芳賀中学校で人権教室が行われました。

全校生徒が宇都宮地方法務局真岡支局長や町人権擁護委員のお話を聞き、人権擁護や子ども110番に関するビデオを見て人権に関する学習をしました。

◀芳賀中学校の人権教室の様子

このほか、町民祭などでの啓発活動、毎月第３火曜日に農業者トレーニングセンターで人権相談を行っています。12月４日には特設人権相談が行われますので、お気軽にご相談ください。